

ユニバーチームに聞く

8月29日から9月2日にかけてフランスで行われた世界学生選手権には、日本から男子6名、女子5名の選手が参加した。結果の概要は前号でもお届けしたが、今号では、選手へのインタビューを本誌、山本が行ったので、その内容をお届けする。

赤石 英美

ヒディ：まず、結果についてはどう思っているのかな。
赤石：全盛期に比べてちゃっちいって感じ。でも、自分がいま持っている力を出切る限りのことは出来たと思います。

ヒディ：それは、当初の目標を達成したということかな。
赤石：一つ目標に考えていたのは、女子団体戦を走ることです。前回は初心者みたいなオリエンテーリングで全然駄目だったんで。

ヒディ：それで、思った通りのレースはできた。
赤石：そう...レースのなかでは、うーん。うまくいったとは決して思っていないですね。精神状態、コンディションの中ではなくとかしたという感じです。満足ということはないんですけど。

ヒディ：じゃあ、実際にはどういうレース内容だったの。
赤石：クラシックと、リレーに関してはよくなかったです。ミスが拡大していくような方向でした。クラシックに関しては、速度をゆっくりに、よしよしと確認しながらやっていたら、結果を見たら凄く遅かったんで。一方、ショートは自分のなかでは満足できる内容でした。B ファイナルの中でも参加者の中で半分ぐらいで走れたんで。

ヒディ：話しは変わるけど、いつごろからユニバーシアードを意識しはじめたの。

赤石：セレクション通ってから。通ると思っていなかったんで、でもモチベーションが低下してて。

ヒディ：それはなんでかな。

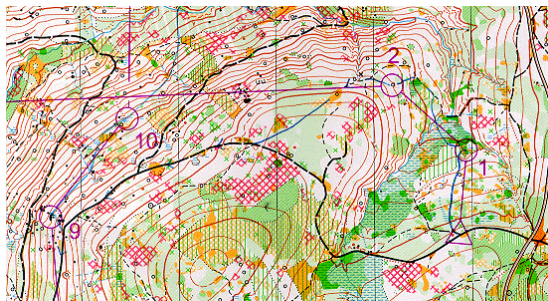
赤石：会社とかその他のことが2年目になってからとても厳しくなったんで。2年前のユニバで悔しい思いをして、次回も行きたいという気持ちが、まっすぐ見えなくなるぐらい、オリエンテーリングも仕事もいっぱいになってしまっていました。トレーニングはほとんどしない状態でした。

ヒディ：そういう状態だったらなおさら、世界とのレベルと力の差を感じた感じだったのかな。

赤石：むしろ、日本で意識を持っている子達、セレクション落ちたのも含めて、と比べると、ボント全然できていない状態でした。実際向こうに入ってから、そういう気持ちを割り切るまでも時間がかかりました。自分で巻いた種は自分でクリアしないといけないんですけど。良いレースはそういう意味でできなかったかな。

ヒディ：まあ、いろいろあったと思うけど、今回のユニ

ユニバー個人戦で使われた地図



バでの経験は今後どのように生かしたいか？

赤石：満身創痍で行ったけど、で前回より恵まれていない状況だったけど、クラシック、ショーと、決勝といくに連れて、毎日集中しなくてはいけない、一日目よりも二日目、二日目よりも三日目といつも集中力を耐えずに行けるんだとはじめて思いました。

ヒディ：じゃあ、今後これからのユニバーシアード選手達に期待したいことは何かある？

赤石：最近の子達はみんなこう、それなりの実力をもって世界に臨んでいて。だから自信を持ってレースの力を本番で出せる精神的なトレーニングをした方が良いと思います。自分の持っている力を正当に評価して。前回は、今回も自分の力を自覚して臨めた選手がよい結果を出せたと思う。それはトレーニング次第。でメンタル面が重要だと思います。

ヒディ：最後に、その他に何かユニバに参加して良かったと思ったのはあるかな。

赤石：あと参加して良かったと思えたのが、みんなが同じ方向を見て頑張っている。国内ならいくらでも当然だけど。それで、トレキャンに入ると、オリエンテーリングモードに入って。みんなと一緒にやるのは大事なことなんだって。やれることやったかかって感じです。

小林 啓恵

ヒディ：思った通りのレースはできた？

小林：いいえ。思ったとおりはできなかった...

ヒディ：具体的に言うと？

小林：思いこみだけじゃなくて、技術面でちゃんとできてなくて、つぼってました。結構普段は、思いこみとか、勘違いでミスをしてしまうことが多いけど、技術面でうまくいってなかった。

ヒディ：それはトレインが日本とは違っていただけかな？

小林：トレイン自体は一緒でした。でも、実際にやってみたら、同じ様に出来ないところがあった。全部がそうではないけど、スムーズにいったというレッグもあった。

ヒディ：トレインのこととは別に、何かを意識してレースに臨んだ？例えば精神的な部分とか。技術的な面とか。

小林：精神的な面ではちょっとなんとも言えない。トレインの方

はやっぱり違うんだろうなと思っていた。なれていないので、いつも通りのことができないかもしれない。と思いながら、地図読みの練習とかはしていました。

ヒディ：ユニバーシアードは昔から意識をしていたの。

小林：きっかけは、2年前に先輩達が行って。

ヒディ：先輩達と言うと...

小林：石井さんとかカッキーさんとかが。4年で行ってたので私でも目指せるかな。それで出たいと思った。

ヒディ：じゃあ、それに対して何かするということはあったの？

小林：でも、ユニバのことより、インカレがあったから、まずインカレの方が中心だった。だから長期的にというのはなにもなかったです。

インカレが終わって、ユニバのセレクションを意識したけど、WCのセレクションがあって、それに出ることができたので、頑張ろうと思った。結果としてWCのセレクションで通過したからユニバのセレクションは免除になりました

ヒディ：じゃあそのワールドカップなんかと比べ、世界との力のギャップはユニバではどうだった？

小林：(ワールドカップは)日本でやったというだけで、国際大会だけだと、不安というのかわからないけど、気持ちが日本のほうが楽だった。

ヒディ：ということは、ユニバではプレッシャーを感じたということ？

小林：それよりも、思った準備が存分にやれていなくて、不安に感じるところがあった。

ヒディ：じゃあ、今回の経験を今後どのように生かしていきたい？

小林：まずインカレがあるので、そこで結果を出す。ユニバではつばらなだけでなく、更にスピードが必要だった。そういうレースをこっちで、自分自信ができるようになりたい。

ヒディ：自身も含めてと言うことだけど、これからのユニバーシアード選手達に期待したいことは何かある？

小林：自分のことも含めて、セレクションを通過してほとんどの部分があって、まあ、そこからその先のことをかんがえていかなければいけなかったけど、不十分だった。そこを通過点として、実際にユニバで自分の持っているものをちゃんと出せるような、そんな風に見えるように心がける。

鈴木 慎一郎

ヒディ：思った通りのレースはできた。

鈴木：はい。そうですね。

ヒディ：もともとどういうレースをしたいと思ったの。

鈴木：海外が初めてだったんで、日本で普段やってきたようなレースをできればと思っていました。トレキャンで感じを掴んで、普段通りのレースができて、だんだん慣れてきたというところなんです。また、ショートの前選では、良いかなと思ったけど、タイムに反映されていなくて、ショックだった。逆にそれがリレーによかったかな。

ヒディ：じゃあ、どういうことを意識してレースに臨んだの。

鈴木：細かいことになってしまうけど、直進やアタックを注意していました。

ヒディ：話しは変わって、いつごろからユニバーシアードを意識しはじめたの。

鈴木：ユニバを意識し始めたのは4年生のインカレが終わってからです。

ヒディ：それで、ユニバに向けてどういうことをしてきた？

鈴木：トレーニングは現役よりも大分しました。技術的にはいいことではないんだけど、安定感が出てきたような気がします。

ヒディ：そういうことをしてきて、世界とのレベル、力の差はどう感じた？

鈴木：やっぱり、良いレースをしてもタイム差がついていて、その差は大きいんだなと感じました。行く前までは日本人の成績とかみても、差があるのは分かっていたんですけど。でもそれは、テレインに慣れてなくてつぼってタイム差があるのかと思っていました。でも良いレースをしても、これだけ差がつくとは、技術面とか走りとかでいろいろ詰めるところがあったと感じました。

ヒディ：じゃあ、そういう今回の経験を今後どのように生かしたいと思う？

鈴木：今回が初めて世界をみてきたというのがあって、まあ、もっと出切ることならそういう経験をしてみたいですね。オーリンゲンとかも行って見たいし。

ヒディ：世界の舞台を垣間見たという感じがな。

そうですね。

ヒディ：最後にこれからのユニバーシアード選手達に期待したいことは何かある？

鈴木：自分が代表になってみて苦労したことは、目標が見えないということ。だから、そこですね。問題は、具体的には個人個人違うと思う。セレクション通って、自分のなかで達成感があった。目標を見失ったんで、そういうことないように、セレクションを通過しても、そこからなんだ。



ユニバーリレーでは4走として、渋い走りを見せた鈴木慎一郎

深沢 博子

ヒディ：思った通りのレースはできた？

深沢：トータルでみたら、できたかな。部分ではできたところもあり、できなかったところもあり...

ヒディ：部分部分というところどううまくいったかな。

深沢：ここをうまくしてこうと決めていた部分があったんで、その部分はうまくいきました。イメージをもっとうまいうのがあって、先読みのイメージをきちんとたてていって、それを実践して行くということをしちんとしよう。それがこなせました

ヒディ：じゃあ、逆にうまくいかなかった部分は。

深沢：いろいろ疲労もありました。また、自分の技術力がおいていない。それに全くミスがなかったわけでもないから。

ヒディ：レースに対しては具体的な結果を目標として臨んでいたの？

深沢：とくにないです。自分の中で、レースに対する目標をいかにこなすかが大事でした。具体的な目標をあげるほどのレベルには達していなかったから。直前まで現地で、やっときちんとオリエンテーリングができるレベルになるぐらい。だから目標をたてる余裕もなかったです。

ヒディ：じゃあ、いつごろからユニバーシアードを意識しはじめたの。

深沢：はじめから意識して行きたいと言うものではなかったです。行けるんだっいたらいきな、プレセレとか本セレで通れたらいいなって思うのと同じ感じ。通っちゃってからどうしようという感じ。そうなってからきちんと考えた。だから、意識的にユニバのセレクションにむけてなにかするのは全然なかった。

ヒディ：通過してからはやっぱ準備したんでしょ。
深沢：日本の女子の選手と比較しても体力的にも技術的にもレベルが下な、という気持ちで自分の中で強かったんで、まず出来るのは体力を補うこと。

ヒディ：そういえば、マラニックとかが行っていたみたいだけど。
深沢：そうですね。でも、すぐに走行距離を伸ばそうと思っても体が言うこときかないんで。目標を決めて。それで、最終的には7月までに、120ぐらいまでに伸ばしました。

ヒディ：そういう地道な努力が自分の思ったとおりのレースに結びついたという感じかな？

深沢：結果にむずびついていたのは最後の最後になってからなんだけど。それまでは、体力と技術がバランス取れなかったんです。オリエンテーリングがとでもい、加減になっていました。

ヒディ：そういう中で世界とのレベル、力の差はどう感じた？
深沢：かなり違うだろうかと予想していました、でもそれ以上に早い選手は早いし。

ヒディ：そうだね、今回はワールドカップでトップを走る、Simone Luder とかいたしね。
深沢：そうですね。

ヒディ：今回の経験を今後どのように生かしたいか。
深沢：具体的に何かを言葉に表すほど決めていないですが、とにかく糧になったのは確か。世界への意識をもてた。自分のなかで、それを意識しつつ、いかに自分を高められるかですね。それに後輩に伝えていきたい。中小大学だと世界への意識はとて少ないんで、後輩にもそういう機会があると教えてあげたい。

ヒディ：これからのユニバーシアード選手達に期待したいことは？

深沢：ちゃんとしっかり考えて、今回イトキョウがショートの前選を通過したのとかあったけど、更にそういう選手が出てきてくればな～という気持ちがあります。

高橋 善徳

ヒディ：思った通りのレースはできた？。

高橋：全体を通して、思ったとおりのレースが出来たかといわれればそれは NO です。それは、思った(そのとき目指していた)レースの方向性が少しずらかったということも含まれています。その目指していたオリエンテーリングの方向性で思った通りのレースが出来たのは、ショートの前選程度でした。自分はオリエンテーリングに対する理解が少なかつたと思います。悔しい一言です。山口インカレのとき期待されていたながら惨敗したあの大会くらい悔しいです。

ショートでは A-final を目標にずっとトレーニングしてきただけにあと 30 秒届かなかったことはうれしいような(現実味が感じられたから)悲しいような気持ちでした。クラシック、リレーは自分のレースが出来ないもどかしさを感じていました。やはり大きな大会で結果を出すことの難しさを感じます。

ヒディ：どういうことを意識してレースに臨んだ？

高橋：大窪的な地形でしたので思ったよりスピードが出ました。ですので、そのスピードを生かしたなかで(そのスピードに負けないくらい集中して)手続きをしっかりと行おうということは意識していました。今考えると、スピードの限界と限界を超えることを混同していたのだと思います。

ヒディ：いつごろからユニバーシアードを意識しはじめたの？

高橋：ユニバーを意識したのは大学2年の夏です。JWOC の代表になれませんでしたので次はユニバーという気持ちでした。

ヒディ：そのユニバに向けてどういうことをしてきた？

高橋：ユニバーに出るだけではだめだと思っていましたので、そこで結果を出せる選手になるんだという気持ちでトレーニングしていました。ただ、現役のころはインカレが最大の目標であったのでインカレを目指す気持ちが結果的に代表になれる実力をつけさせてくれたのだと思います。

ヒディ：世界とのレベル、力の差はどう感じた？例えば、高橋：ワールドカップに比べギャップは小さくなったように思えた？
ワールドカップに比べれば力の差は確実に小さくなったと思います。WC で感じたようなどうしようもないという印象はなくなりました。自分のレースが出来ればショートの A-final にも手が届くということがわかっただけでも収穫です。しかしユニバーの優勝者は WC で 20 位前後の選手ですしフィンランド、スウェーデンの選手が参加していなかったことを考えるとなんともいえませんが...

ヒディ：今回の経験を今後どのように生かしたいと思っている？

高橋：何はともあれ、外国のいろんなタイプのテラインを経験できたことは自分にとって最高の収穫です。今回のユニバーはオリエンテーリングに対するモチベーションを高めてくれるものとなりましたし、自分もがんばれば中堅国の選手たちと肩を並べて走れるのではないかと自信もつきました。ただ、そのためには今以上の質の高い練習が必要です。技術的にも、体力的にも一段づつではあるがしかし確実に踏みしめていくつもりでがんばりたいと思います。今後のレースとしては 2005 年の WOC が最大の目標になるでしょう。自分としてはリレーの優勝が目標です。可能性は 0 ではないと感じています。そのためにも、日本人選手の大きなレベルアップが必要です。今の経験を次に確実につなげていきたいと思っています。悔しい経験は次への大きなエネルギーになると考えています。

ヒディ：これからのユニバーシアード選手達に期待したいことは何かある？

高橋：もちろんいい成績を出してほしいと思っています。それはまずはじめに期待します。そのために何をすべきか?日本の代表になったことに満足してしまっは絶対だだだと思いません。何かと忙しい時期ですし、代表になって一安心してしまう人もいるかと思えます。でも、一番大事なのはユニバーに向かってインカレ並(おそらくこれが学生の中での最高峰レース)に最高の準備をすることだと思えます。最高の準備をせずにユニバーに行っても得ることはありません。体力的にも、技術的にも最高の準備をすることが出来る人が代表になってほしいと思います。僕は、ユニバーが最終目標になってほしくないのです。いい経験をして、次につなげてほしいのです。逆にそうすれば、結果は自然とついてくると思います。2年後、僕はどうしているかわかりませんが(選手として参加しているか、応援しているか。一応権利はある)応援していますし、何か聞きたいことがあればいつでも相談にのります。



トレキャンプ中、フランス料理屋でのひとこま
(手前右より、金沢、鈴木、塩田、山口)

柿並 義宏

ヒディ：思った通りのレースはできたか。

柿並：半分できたかな。

ヒディ：なんで半分？

柿並：レースの半分は良かったということ。前半はうまくいったけど、後半がちょっとまいい。まあいい面と悪い面が出たという感じですか。

ヒディ：半分しか出なかった原因はどこにあるのかな？

柿並：今回の場合、体力的な面で、調整に失敗した。仕事が忙しかったので、練習を疎かりすぎたりしてしまってちょっと、その辺、うまく体調を考えて練習をコントロールするのが欠けていました。

ヒディ：柿並は前回のユニバにも出場しているけど、そこらへんで、目標とかは違ったのかな。

柿並：そうですね。目標としてはショートの決勝に残りたいというのがあったんですけど、でも、そのためにどうするかというのがまいい見えなかったかな。それも前回のときに、その力の差がよく見えてなかった。どうする方法でどれくらいで決勝に残れるのが全然分らなかった。日本でやっている中で、レベル上げていくというのをしていたけど、

世界を見据えてと言う感じはあったので、地道にやっていました。でも、ワールドカップは差がありすぎて全然分らなかった。

ヒディ：いつごろからユニバーシアードを意識しはじめ、ユニバに向けてどういうことをしてきたのかな。

柿並：前は本当に何も出来なかった。メンタルな面で負けていたと言うのがあって、そこらへんが心残りだった。自分がやれるだけのことを出来なかった気がして。

ヒディ：世界とのレベル、力の差は前回とかと比べてギャップは小さくなったように思えたの。

柿並：今回ははっきりと見えるようにはなっていた。それで、メンタル的に気負ったと言うのはなかった。技術的に言っても、後半スピードの差が出たけど、レベルは上がっていると思う。上がっているけれどもそれがまだ足りなかったようでした。僕の一番の課題としては安定感がないこと。その原因が見えていたけどユニバまでに修正できなかったですね。また、一番違いを感じたのはスポーツ選手として基礎的な体力とか。やっぱりかなわないかなという感じ。

紺野とかはまだ余裕を持って走っていたから A 決勝に残れるだろうけど、僕の性能ならちょっと無理なのかな。

ヒディ：今回の経験を今後どのように生かしたい
柿並：無理をした練習をしない。どうしても動いていると忙しい

ときとそうでないときがあって、頑張っても体力がなくなるとばかり。そこらへんはちょっと考えなくてはいけない。まだ探っているところ、でも、何をやればいいのかみえてきた。榛原ではじぶんとしてはよかったです。まだやっちゃっているけど、ちょっとしたミスで5つぐらい順位は違っていたかな。榛原でもそうでしたけど、体力的な面が解決されないですね。グラフを見ると前半ではいいんだけどやっぱり後半で落ちてしまう。
ヒディ：これからのユニバーシアード選手達に期待したいことは何かある。

柿並：：A 決勝に残ってくれと言うことですかね。ちょっとうまく言えないけど。まあインカレが最後じゃなくもっと上を目指して行けば、更に上の世界選手権とかにつながるのじゃないかな。そういうのを考えてもらえれば。

山口 大助

ヒディ：今回は思った通りのレースはできた？

山口：クラシックについては、レースに臨んだ時点で自分が可能なペースでレースを組み立てていけた点で評価できると思う。終盤、体力切れになっちゃったけど、ショートについては、クラシックのレース中に他の国の選手と争ううちに、クラシックと同じようなペースで走って行けば、まったく相手にならないと感じ、自分のコントロールのきく限界まで追い込むつもりでいた。結果オーバースピードになり、とんでもないミスをしたが、その以外にはいいレースであったと思う。

ヒディ：いつごろからユニバーシアードを意識しはじめ、ユニバに向けてどういうことをしてきたのか。

山口：今回のユニバーは2年前の大会の時からある程度視野には入れていた。宿で一緒だったドイツ人にまた2年後って言われていたから。ただし、現実問題として、社会人になる今年、本当に参加できるのか？思ったようなトレーニングは可能なのかなど、問題点は山積みであった。そのような状況下で可能な限りの時間は割いたが、その大半を体力の回復に充ててしまった。

ヒディ：世界との力のギャップをどう感じた？特にワールドカップと比較して。

山口：普段から追い込んだ状態でレースをしているか否か、追い込んだ状態での技術の差が歴然としていたと感じました。世界選手権やワールドカップに比べギャップがどのぐらいのようより、今回のレースで初めてギャップを認識できたと思っています。

ヒディ：じゃあ、これからのユニバ選手に期待することは何かある？

山口：ユニバーだけで終わらないでください。

2005年には日本の世界選手権です。

ヒディ：どうもありがとう。

SQUADからのお知らせ

SQUAD 強化部 藤井範久

2001年世界選手権日本代表選手予備選考会(予告)
みちの会との共催で、次の内容で開催する予定である。

開催日:2001年2月4日(日)

テレビ:埼玉県・日和田山

レース形式:ショートディスタンス

これにともない、予備選考会に参加を希望する選手の「日和田山」への立ち入りを禁止する。

2001年世界選手権日本代表選手選考会
(レース変更)

前号の発表を以下の内容に変更する。レース日程が変更されています

全日本大会21Eクラス 優勝者

4月15日(日)(ショートディスタンス)

4月30日(月)(クラシック)

選考条件は、4月に実施される選考レースでは、優勝タイムから105%以内のタイムのもの、その他SQUAD強化部長が選考するもの

ワールドゲームズ2001秋田大会選手選考について
日本代表選手は男女2名ずつ。この4名がチームになったミックスリレーという新種目も登場。日本選手の選考は、JOAより正式に発表があると思いますが、ほぼ以下のようになっています。

- 男女各2名ずつ
- 本年度全日本選手権者(ないしは上位)を1名ずつ
- 秋田県オリエンテーリング協会が男女いずれか1名を、エリートポイント上位から指名する。
- 残りの1名についてはJOA事業推進会議を母体とする選考委員会が全日本、東西の結果によって決定する。

「エリートポイント2000」対象レースの追加について
2000年度の対象レースとして以下の大会を追加します。

・大阪OLC25周年大会(大阪)

この追加により、今年度の対象レースは以下のようになる。

対象レースは今後追加する可能性がある。

World Cup Event1 及び富士山こどもの国2日目(静岡)、愛知作手(愛知)、東京大学(埼玉)、榛原2日間大会1日目(奈良)、筑波大学(茨城)、東日本(群馬)、多摩OL(東京)、大阪OLC(大阪)、早稲田大学(千葉)、全日本(宮城)

1月合宿募集要項

期日 01年1月6日(土)、7日(日)、8日(成人の日)

場所 愛知県東加茂郡、南設楽郡、額田郡

宿泊 県営「本宮山ロッジ」

住所:愛知県額田郡額田町大字石原字間苅90の3

電話:0564-83-2200

料金 ¥1200円/泊 ¥1500円/夕食

¥800円/朝食(税別)

募集人員 参加定員、30名(選手25名、役員5名程度)
参加資格 強化選手、ユニバー代表選手および補欠選手経験者、インカレ&インカレショート入賞経験者、EP 男子25位 女子15位まで、上記参加資格と同等の実績があるとして強化部が参加を認めた者。

参加費 ¥3000円/日 6日、8日の一日あたり。詳細は石井龍男 Tel 0475-72-8005

e-mail tachangi@gw4.gateway.ne.jp



ワールドカップ遠征チームに聞く

フィンランド・ラハティにて開催されたワールドカップに参戦した日本のトップ選手である松澤俊行選手と、若手の期待の星として注目を浴びている高橋善徳選手の二人に、同じく日本代表として参戦した山本英勝が、フィンランドシリーズについてインタビューをしました。

山本英勝(ヒディ):じゃあ、まず、松澤から聞こうか。今回のワールドカップについて全体的に自分の評価は？

松澤俊行:ええ、富士のワールドカップの結果をうけて、それよりは差がつかないという感じで来ました。あとフィンランドは非常に難しいという印象はありましたんで、まあ、本当にモデルに入ったときはどうなるかと思いました。

本当にスピード上げられなかったです。ただ、ショートとミドルを走って見たら、大きなミスとかもしたんですけど、結果的には見積もりぐらいの差だったので。クラシックはちょっと頑張ろうかなと思ったんですが、序盤の細かい地図読みが必要とされるような場所だとちょっと太刀打ちできなかったですね。

ただ、まあ今まで海外であったように、ちょっとミスするとへこたれてしまって、やはり駄目だったと思ったり、必要以上に、そうですね、周りが速く見えたりっていうところからは、一つ、レース中どんなことになっても自分のオリエンテーリングを保とうという意思が持てたと言う点ではちょっと良かったかなと思います。まあその分、来年同じ国で世界選手権があるのでですけども、それに向けては非常に良いものを得られたと思います。

ヒディ:じゃあ善徳は？

高橋善徳:えー、俺はまあ、みんなより一週間速くタンペレ(注:来年の世界選手権開催地)入りして、トレーニングキャンプを張っていたんですけど、そこでのトレーニングと言うか、練習の成果を発揮できなかったかなと。

やっぱり、こう...ワールドカップだから、きちっと準備してきている訳だから。その辺の、こう、準備は自分的に甘かったかなというのがあるし、タンペレとは山の雰囲気がちよっと違っていたと言うのもあるし、タンペレでは全部一万分の1でトレーニングしていて、一万五戦分の1になって対応できなかったのと。

あとフット0の世界大会というのは初めてだったんですけど、まあ、ショートはそこそこ良かったけど、距離が長くなるにつれて、ぼろが出やすくなって...まあ全体的には、うーん、まあとりあえず、こなしただけという感じに終わってしまったんですけど。そうですね、来年への手応えというか、まあ、自分できちっとオリエンテーリングすれば、ここまで出来ると言うのが分かったから、それが収穫だったかな。

ヒディ:今回の結果として、今までの松澤やってきたことを続けられれば、例えば、世界選手権で予選を通過できるようなレベルに到達できそうだという感覚があるの。

松澤:まあ、今のところは予選通過で、本当に国際大会の中で中堅と言えるような選手になるというのが短期的な目標ですね。その先はまだあまり考えていない状況なんですけど、ただ、例えば今回の50位の選手とのタイム差を見ると、長期的には50位なり40位ですね。ポイントだったら45位ですね。まあそこへんを見ていかないといけないですね。北欧の上位の選手のようにするには、今までのやり方はちょっと足りないかと思えますね。

ヒディ:村越さんもちょっと同じ様なコメントをしていて、ある程

度北欧で修行をしないとということも...今回はタンペレでトレーニングキャンプをやったけど、更に長期化してやる必要があるのではないかな。

善徳:そうですね、こっちに来て、やってきてうまくなってくるのが分かったし。対応できてきているというのがわかったから、あと一ヶ月居たら、もっともっとうまくなるだろうなというのがあった。こっちで、一ヶ月ぐらいやらないと、一週間ぐらい来てちょっとやって、結果が出るというのは難しいと思います。向こうの選手達はこういったトレインで何年間もやってきているわけですから。

ヒディ:まあナカナカ難しいですけど。松澤は

松澤:そうですね。なんとかして方法を見つけないと駄目ですね。実際一ヶ月こちらに来てやるというのは現実的ではないんで。日本のトレインでも先ほど挙げたような細かい地図読みの駆け引きピエーションのシチュエーションをトレーニングするというのも工夫すれば出切るかもしれないんで。

ヒディ:そういうトレーニングを日本でもやりたい。

松澤:そうですね。例えば、自分は知らないむつかしめのコースを、既に何回も走った人がやるような。実際自分が日本でやっている、自分より巡航速度が速い人という人と併走するということはほとんどないわけで。そのへんをなんとかもうちょっとある意味、なんらかの部分抽出したような練習をしないとけないですね。

ヒディ:そういう意味では、今回のワールドカップのように日本でもレッドグループ(注:ワールドカップ等の成績で上位選手は後ろからの時間帯にまとめられてスタートした)という風に、早い人達を集めてスタートするのがいいかもしれないね。そうすれば、マッチャン(松澤)とカッシー(鹿島田)と村越さんが併走するような状態も出てくるかもしれない。

松澤:それは、面白いかもしれませんね。

ヒディ:じゃあ最後に

善徳:北欧でオリエンテーリングすると楽しいんで。これがオリエンテーリングというのが分かるんで、お金の余裕があれば、どんどん出て行って、こういう世界があるんだと言うのを見るのも楽しいんじゃないかな。

松澤:そうですね。まだ日本でやれることも別にあると思うんで。北欧に何回に来れるわけではないんで。日本で出来ることをまずちゃんとするということですね。

まあ、ホントに世界のトップと比較してしまって、なんだそんなに差があるのかと。もうちょっと中間の目標なり設定してそれらをクリアしていくと、それは競技者だけではなくて、いろんな点でね。大会運営なりに、そういったものをあらゆるところで必要じゃないかな。まあ、こちらはオリエンテーリングは百年の文化ですからね。

ヒディ:じゃあ、どうもありがとうございました。